

氏名	丁 野 真太郎		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	博 乙 第 2167 号		
学位授与の日付	平成2年 9月 30日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当）		
学 位 論 文 題 目	Double staining 法による胃癌所属リンパ節リンパ球の機能的サブセットの解析		
論 文 審 査 委 員	教授 赤木忠厚	教授 木村郁郎	教授 寺本 滋

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

胃癌所属リンパ節リンパ球の免疫学的抗腫瘍能を検索する目的で、T細胞およびNK細胞に対する数種のモノクローナル抗体と蛍光抗体法を組合わせた double staining 法を凍結組織切片上で行い、各種免疫担当細胞サブセットの分布動態を検討した。CD8⁺細胞のうちCD11b⁺細胞（サプレッサーT細胞）はわずかで、ほとんどがCD11b⁻であり細胞障害性T細胞と判定された。CD4⁺細胞のうちLeu8⁺細胞（サプレッサーインデューサーT細胞）とLeu8⁻細胞（ヘルパーT細胞）はほぼ同数で、互いに混在して認められた。OK-432局注群でCD4⁺Leu8⁺/CD4⁺の比率に増加傾向がみられた。CD8⁺細胞あるいはCD4⁺細胞に占めるOKT9⁺あるいはOKIa1⁺の活性化T細胞は少数であった。術前BRM腫瘍内投与群で、CD4⁺細胞のサブセットに変化がみられた。Leu7⁺CD16⁺細胞は認められず、一部の転移巣内にNK活性が強いとされるLeu7⁻CD16⁺細胞がみられた。以上より、胃癌所属リンパ節は潜在的抗腫瘍能を保持しているが、十分にその機能を発揮していないものと考えられた。また、術前BRM腫瘍内投与はCD4⁺細胞の活性化を誘導することが示唆された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は術前BRM投与および非投与の胃癌所属リンパ節リンパ球の機能的サブセットを、単クローン抗体による二重染色法で免疫組織学的に研究したものであるが、従来十分明らかにされていなかった各種免疫担当細胞サブセットの分布動態について、重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。